登壇者

**松山 沙樹（まつやま・さき）　京都国立近代美術館　研究員**

大学時代に西洋美術史を学びながら博物館ボランティアに従事した経験から、ミュージアムという場の可能性に関心を持ち、英国レスター大学博物館学研究科に進学し美術館教育について学ぶ。2015年より現職。学校連携やワークショップなどの教育普及活動を通して、さまざまな人たちと協働しながら美術館での体験をときほぐす取組みを続けている。2017年からは、見える・見えないに関わらず楽しめるユニバーサルな美術鑑賞のあり方を探る「感覚をひらく」事業にも携わっている。

**光島 貴之（みつしま・たかゆき）　美術家・鍼灸師**

 1954年京都生まれ、在住。10歳頃に失明。大谷大学文学部哲学科を卒業後、鍼灸院開業。鍼灸を生業としながら、1992年より粘土造形を、1995年より製図用ラインテープとカッティングシートを用いた「さわる絵画」の制作を始める。1998年、「'98アートパラリンピック長野」大賞・銀賞を受賞。他作家とコラボレーションした「触覚連画」の制作や、2012年より「触覚コラージュ」といった新たな表現手法を探求している。2020年1月、ギャラリー兼自身の制作アトリエとなる「アトリエみつしま」を立ち上げる。対話しながら絵を鑑賞するグループ「ミュージアム・アクセス・ビュー」の結成に参加した2002年以降、京都市内の美術館等を中心として、鑑賞活動にも積極的に取り組んでいる。

**白木 栄世（しらき・えいせ）　森美術館 ラーニング・キュレーター**

熊本県熊本市生まれ、2006年武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程修了。ミュゼオロジーやアートマネジメント、現代美術史について学んだ学生時代より美術館教育の現場で活動する。2003年より森美術館勤務。森美術館の展覧会に関連するシンポジウム、ワークショップ、アクセスプログラム、学校プログラムなど、ラーニング・プログラムの企画・運営を行っている。2003年より開始した「手話ツアー」「耳でみるアート」などのアクセスプログラムの立ち上げから携わる。

**栗原 剛（くりはら・ごう）　森美術館「手話ツアー」参加者**

東京都出身。森美術館の手話ツアーに高校生の時に参加したときに多様な見方や意見を交換することに引き込まれ、美術館に足を運ぶようになる。重度の感音性難聴でコミュニケーションは読唇術か音声認識ソフトを主に使用。海外旅行が趣味でこれまで35カ国ほど訪ねる。米国留学も経験し、アメリカ手話も可能。2015年早稲田大学経済学研究科修士課程修了。現在は、金融にて調査業務に従事。

**柴崎 由美子（しばさき・ゆみこ）　NPO法人エイブル・アート・ジャパン代表**

1973年宮城県生まれ。芸術大学在学中に障害のある人の作品に出会い、制作の現場に関わりたいという思いから、奈良市の市民団体「たんぽぽの家」の活動に参加。2004年コミュニティアートセンター開設、2007年にエイブルアート・カンパニー事業をスタートさせ、2011年に東日本大震災を契機に活動拠点を東日本にうつし、現組織の事務局長に。2013年より代表理事も務める。2021年より文化庁による「障害者等による文化芸術活動推進事業」の助成を得て「みんなでミュージアム」を企画し、ミュージアムに行きづらいと感じる人を含めだれもがアクセスできる仕組みづくりを継続中。

**カミジョウ ミカ（かみじょう・みか）　アーティスト・「みんなでミュージアム」参加者**

1976年生まれ。長野県在住。19才の時に、入院していた病院の主治医や看護師、理学療法士の顔をデフォルメして描き始める。現在では、自宅でアクリルガッシュ・オイルパステルなどを使い、空想画・抽象画を描いている。自分の頭の中に浮かぶ「カラフルな空想と夢の世界」をテーマとし、創作し続けている。2024年5月に開催された横浜トリエンナーレのアクセスプログラム「オンラインで楽しむ妄想モクモク鑑賞会」に企画協力・ファシリテーターとして参画。

**日比野 克彦（ひびの・かつひこ）　東京藝術大学学長**

岐阜県美術館、熊本市現代美術館にて館長。東京藝術大学にて1995年から教育研究活動、2022年から学長。現在、文化庁と厚生労働省が共同開催する障害者文化芸術活動推進有識者会議の座長を務める。

**鈴木 智香子（すずき・ちかこ）　国立アートリサーチセンター　研究員**

2009年武蔵野美術大学絵画科版画専攻卒業、2011年東京造形大学大学院美術研究領域版画コース修了。国内美術館でのインターン研修やボランティア活動をきっかけに、美術館教育の道を歩み始める。神奈川県立近代美術館、東京藝術大学（「Museum Start あいうえの」にプログラムオフィサー）での勤務を経て、2022年より現職。共著に「こどもと大人のためのミュージアム思考」（左右社、2022年）がある。

**伊東 俊祐（いとう・しゅんすけ）　国立アートリサーチセンター　客員研究員**

先天性の全ろう。國學院大學文学部博物館学研究室で研究教育に携わるとともに、国立アートリサーチセンターのアクセシビリティ事業を担当。博物館学を専門とし、障害者の生涯学習や文化芸術に関わる研究を進めている。

**稲庭 彩和子（いなにわ・さわこ）　国立アートリサーチセンター　主任研究員**

青山学院大学修士（芸術学）修了の後、ロンドン大学UCL修士（Museum Studies）修了。専門は美術作品や文化資源を軸にした、人と社会のつながりの構築や学びの仕組みづくりなど。神奈川県立近代美術館や東京都美術館にて20年程学芸員として勤務する中で美術館のアクセシビリティの課題に取り組む。2022年度から現職。著書として『コウペンちゃんとまなぶ世界の名画』（KADOKAWA、2021）、『こどもと大人のためのミュージアム思考』(左右社、2022)等。

**片岡 真実（かたおか・まみ)　　国立アートリサーチセンター長**

2003年より森美術館勤務、2020年より同館館長（2020年～現在）、2023年に国立アートリサーチセンター長着任。2007～2009年はヘイワード・ギャラリー（ロンドン）にてインターナショナル・キュレーターを兼務。第9回光州ビエンナーレ共同芸術監督（2012年）、第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督（2018年）、国際芸術祭「あいち2022」芸術監督。CIMAM（国際美術館会議）では2014～2022年に理事（うち2020～2022年は会長）。